水牛通信　毎月１回10日発行　1983年11月10日発行　通巻52号　1980年５月23日第三種郵便物認可

水牛通信

VOL.5 NO.10
毎月1回・10日発行
定価200円

人はたがやす　水牛はたがやす　稲は音もなく育つ

TOKYOとうきょう　スラチャイ・ジャンティマトン　2
ありがとうカラワン　小泉英政　4
カラワン楽団の日本日記　八巻美恵　6
地下からの対話　スニット・ティワワェート　25
水牛楽団のページ　34

Tokyo　とうきょう

スラチャイ・ジャンティマトン

Tokyo Tokyo
ひとり歩けばこころはうつろ
ちっぽけな俺ひとり
おそるおそるおまえを見る

Tokyo Tokyo
ひとりぼっちだよな、ほんと
夢みてるのかな
だけどポケットはクシャクシャ

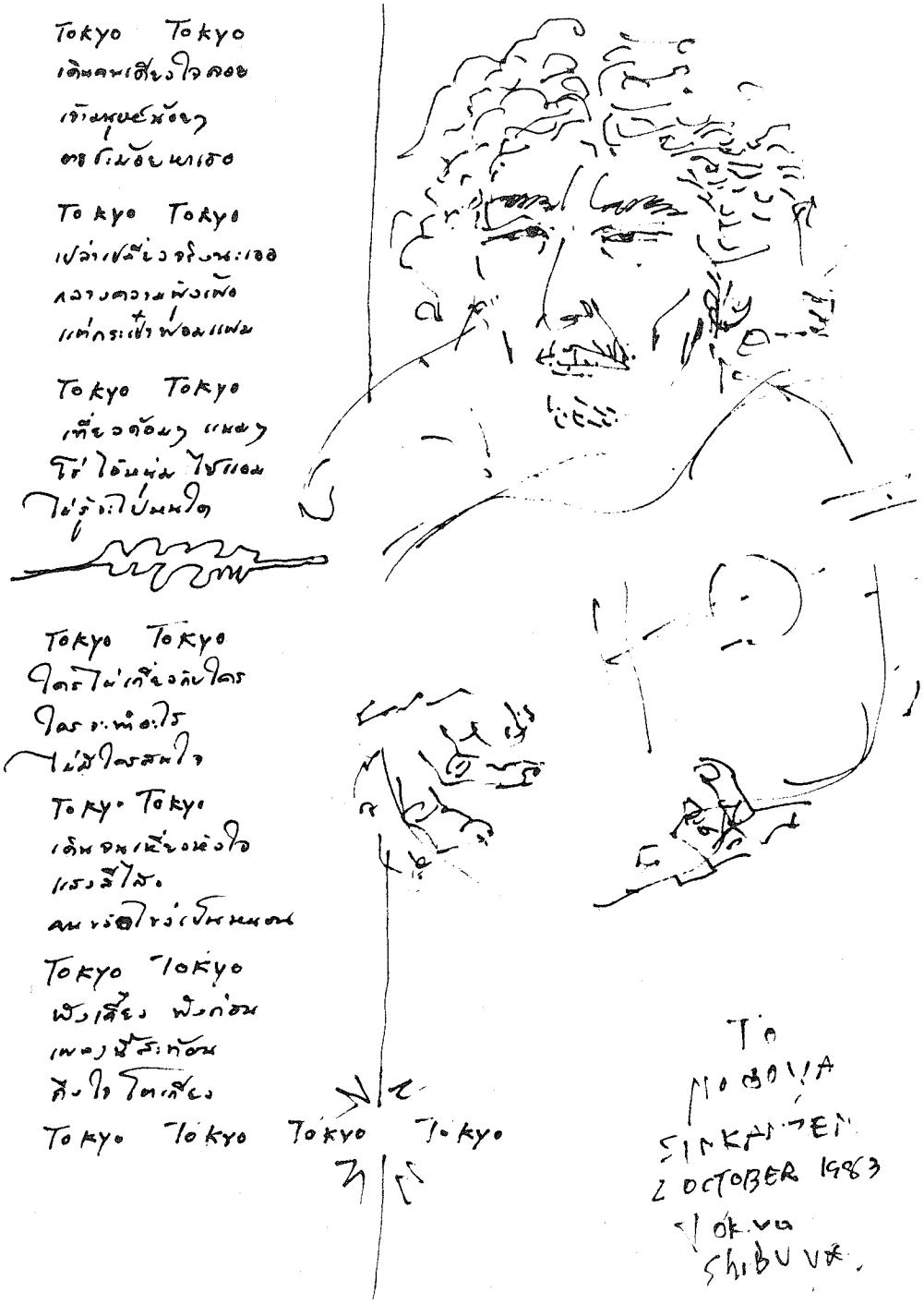
Tokyo Tokyo
おっかなびっくり近づいてみる
クソッ、サイアムの田舎者
どっちへいけばよいのやら

Tokyo Tokyo
誰もかれもかかわりがない
誰が何をしたところで
誰も興味を示さない

Tokyo Tokyo
歩いて歩いて、こころもなえる
おびただしい光の洪水
蟻みたいに人びとが行き交う

Tokyo Tokyo
ちょっと聴いてくれないか
ぼくのこの歌は東京の
こころにとどくのか
Tokyo Tokyo Tokyo Tokyo

(1983年10月２日　新幹線にて)



ありがとうカラワン

小泉英政

カラワンは
三里塚の大地と空に
今まで見たことのない花を咲かせ
今まで見たことのない鳥を飛ばせた
四人の男たちは
花と鳥を自由にあやつり
空から花たちは降り
野からは音もなく鳥たちが飛び立った
俺たちよりもっともっと貧しく
俺たちよりずっとずっと荷酷な弾圧
タイの農民たちの
心をとらえた歌
生きるための歌が
花となり
鳥となって
ありがとう
カラワン

この地よりもっともっと乾いて
この地よりずっとずっと厳しい搾取
イサーンの農民たちの
心の水となった
生きるための歌が
草となり
雲となって
ありがとう
カラワン

トラックの荷台で
カラワンは歌った
ありがとうの言葉いがい
しゃべらなかったけれど
生きるための歌は
風となりて
光となって
ありがとう
カラワン

一九八三年十月四日

カラワン楽団の日本日記

八巻美恵

九月にはカラワンをよぼうと、人しれず春ごろから準備をしていた。コンサートの予定もきまり、八月二十八日に飛行機の予約もとってあった。それなのに、その十日前にまだヴィザがとれていないことが判明した。書類は審査のためタイの日本大使館から外務省へ送られたというので、それから毎日午前午後の二回、外務省査証課へ電話する。運わるく査証課のタイの係の人が夏休みをとっていて、はなしがスムーズにいかない。書類はさらに法務省まで送られてしまった。法務省へ事情を説明にでかけたのは八月二十五日だから、二十八日に来ることはできないだろうというのが関係者一同の一致した見解だった。次の便は三十一日だ。それにはなんとか間にあうだろう。タイにもそう連絡した。

二十六日にヴィザはおりた。外務省の人も法務省の人も、よいコンサートにしてください、とまとめのことばを言ってくれたのでホッとする。

連日お役所との折衝でわたしはつかれはてていたから、三十一日までの間ヒマができて休めるのはかえってありがたい。とおもう間もなく二十七日の朝、モンコンから電話があって、なんだかしらないがヴィザが間にあったから予定通り今夜のるよ、あしたは大きなクルマでむかえにきて、とこうだ。電話のむこうの声はうれしそうだが、そして、ほんとはうれしい知らせのはずなのだが、こちらからはいまひとつ声がはずまないのだった。わたしとしては三十一日にいらしていただきたかった。だってはじめからこうつかれていたのではこまるじゃないか。

8月28日

カラワンの四人ののったインド航空の飛行機は二時半すぎに成田につく予定だ。お昼ごろ、渡辺くんの運転するレンタカーのマイクロバスでむかえに行く。日曜日のせいか道がすいていて予定よりはやくついたので、まずビールをのんで前祝。気もちよくなったところで到着ロビーにおもむくと、飛行機のほうも予定より二十分ほどはやくすでに到着していた。遮光ガラス風の、荷物検査のカウンターからロビーに通じるドアのなかをのぞくと、あっ、スラチャイのもしゃもしゃ頭がみえる。ほんとに来ちゃったんだ。モンコンがこちらに気づいて手をふっている。去年モンコンがひとりで来たときは観光ヴィザだった。ピンなどというみなれぬ楽器をもったタイ人に入管はキビしく、大麻所持のうたがいでかなりながいこと彼は追及をうけ、署名までさせられたのだった。だけどこのたびは堂々芸能人ヴィザをとっているので、すんなり通った。

日本で四人に会えるなんてウソみたい、とおもいつつ握手する。それぞれあたらしいシャツ、あたらしいズボン、あたらしいクツなどを身につけて、なんだかいやに小ざっぱりとしているではないか。楽器、着がえ、カセット・テープとレコードなどの荷物をつみこんですぐうちへむかう。インド航空はいかに食べものがまずいかと口々に言っているうちに着いてしまった。タイの食べものはからくおいしく、それに安い。毎日おいしいものを食べているうえに、味に関しては保守的な人たちに、あしたからごはんを作って食べさせなければならないのか。

カラワンと水牛の全員が顔をあわせたのはきょうがはじめてだ。缶ビールのいちばん大きいのを三つほど買ってカンパイする。近所の焼肉屋でいっしょにごはんを食べてから、スラチャイは疲れをおして福山家に行った。ウィラサク、トングラーン、モンコンの三人は動きたくないというのでうちにとまる。

マイクロバスの借り賃と食事代をあわせると約六万円の出費。経済のことをつきつめてかんがえるとコワクなるので、はじめからどんぶり勘定にする。赤字になることだけは、いずれはっきりしているのだし。

真夏のような暑さがとつぜんぶりかえした。タイから暑さまでもってきてくれなくてもいいのに。

8月29日

ウィラサクは高橋悠治といっしょに東京でのコンサート会場、ユーロ・スペースを見に行った。ついでにヤマハにも寄ったらしく。きょうは、いかに日本の物価が高いかという話題に終始する。

8月30日

カラワンの四人は、うちと荻窪の福山家に分宿しているので、朝電話でその日の予定を調整しあう。きょうは練習の予定がキャンセルされて、あそびの日になった。荻窪方面にいる人たちがなにをしてあそんだのかは定かでないが、こちらはトングラーンとモンコンの三人で銀座の方へでかけた。タカシマヤで絵の展覧会をみてから、山野楽器でレコードと楽器をみているうちに日がくれた。ハモニカ用マイクというのがあって、モンコンはそれを買ういきおいだったが、残念ながら在庫がない。トングラーンはバイオリンの弦を買った。蛍の光がなって店を追いだされると、外は夕立もやんですこしすずしくなっている。雨あがりに足のわるい人と銀ブラするなんてなかなかステキだ。去年やはりいっしょに銀座にきて、大きなビアホールに寄ったら、モンコンがそこで流れているドイツ風音楽にびっくりして、これはヒッラーみたいだ、と言ったのをおもいだし、こんどはふたりでトングラーンをそのビアホールへご案内する。音楽はあいかわらずヒトラー風で、お客の喧騒もひどかったが、黒ビールはおいしく（黒ビールには精力剤がはいってるんだぞ、とモンコンは言ったけどほんとかしら）ふだんは口の重いトングラーンも、大ジョッキをあけるころにはよくしゃべった。もしかしたらあのヒットラー風音楽鼓舞されたのかな。タイ語でとりとめのないはなしをとりとめなくしゃべりあう。いい気もち。

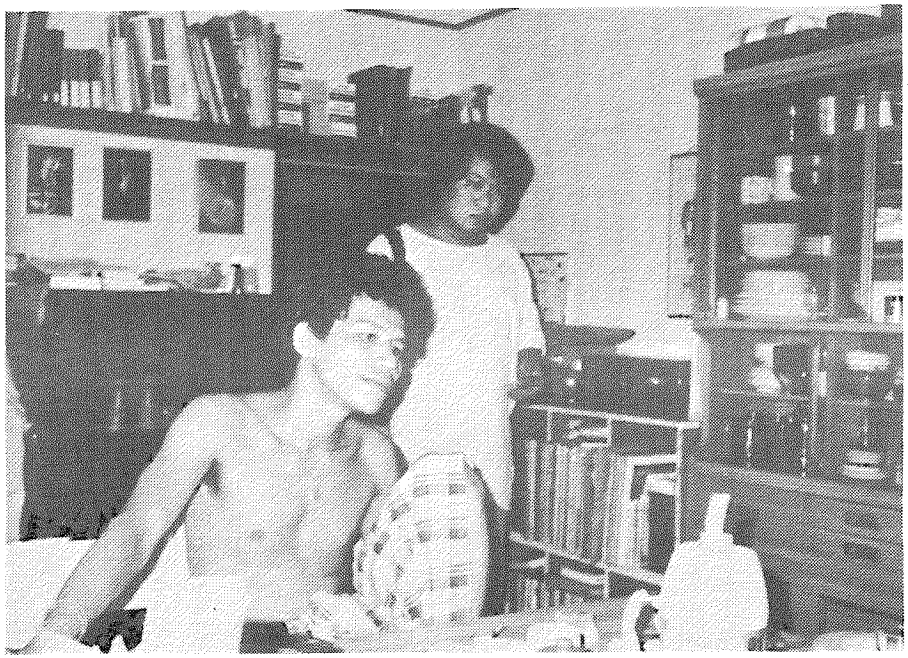
男二人はまだのみたりないというので、火牛楽団の初代メンバーだった河さんが渋谷でやっているシラノという店に行って、またのんだ。

8月31日

午後カラワンは練習。東京で演奏するのはタイでやるのとは意味がちがう、だからできるだけよい演奏をしたい、とスラチャイは言い、うちの台所兼居間兼仕事部屋という、まあたったひとつしかない部屋で練習をはじめた。ひとつの曲をちがった風に何度か演奏し、カセットテープに録音する。それをみんなできいてみて、どれにするかきめる、といった練習のやりかた。

三曲ぐらいすんだら、ウィラサクがねむいといいだして、練習の途中だというのに、ほんとうに大いびきをかいてねむってしまった。これにはさすがのわたしもおどろいた。スラチャイは気げんがわるくなる。

夜は歓迎会なので気をとりなおしてでかける。あつまったのはカラワンの四人、水牛楽団の五人、小室等、荘司和子、津野海太郎、平野甲賀、柳生弦一郎、田川律、窪田聡、



それにアジア民衆演劇会議に参加していたタイの女の人二人、タとウィエンチャイ、主催者側の桐谷夏子。タイの女の人たちはきょうから福山家にとまることになった。さらに日本でのカラワンを取材しに「マティチョン(人民の声)」という新聞の記者スニットと、マネージャーのようなこともし、今もカセット作りなどに協力しているセーニーも来るという。四人の予定が八人もかかえることになって、わたしたちはアタマがいたい。タイではお客が四人だろうと八人だろうと大差ないのだ。わたしたちは自分でおもっている以上に不自由なのかもしれない。

9月1日

ウィラサクとトングラーンと、生きるための歌のような歌をやりながら生活することの困難さについて、はなす。

カラワンだけではやっていかれないので、トングラーンはいっしょにくらしている女の人と、新聞や雑誌や本を売るちいさな店をやっているという。ウィラサクのおくさんは先生で、彼女のかせぎでくらしはなりたっているらしい。彼はなにも仕事をしないで家にいて、子どものめんどうをみるというのが理想だそうだ。

トングラーンはわらいながら、カラワンてのはもう十年もやっているのに、はじめのころからちっとも上達しないんだ、どうしてかねえ、という。

9月2日

池袋の文芸座に「家、世の果ての」を観に行く。如月小春さんの一人芝居。芝居ならいっしょに観に行きたいとモンコンがいうのでつれていった。仕かけのおもしろさはあったが、とにかくことばがわからないので、終ったとたんに、これは何のはなしだったの？　ときかれてしまった。タイ語で説明するのはムズカシイが、おたがいに想像力を駆使してのりきる。

荻原朔美さんも観にきていて、ちょっとしゃべった。

9月3、4日

渋谷のユーロ・スペースではじめてのコンサート。水牛楽団の自主コンサートでもある。土、日なので人が来るのだろうかと心配したが、三回とも超満員で赤字の心配はふっとんだ。

水牛楽団はこの日のためにはとうとう練習しなかった。当日のリハーサルもほんの十五分ほどで、あとは雑用で走りまわる。

リハーサルがすんで、本番の前にごはんを食べる。スラチャイは、はしの袋をひらいてそこに本日のプログラムを

書きつけ、メンバーと通訳の和子さんにわたした。

会場は人いきれで暑い。冷房を最強にしても汗がながれる。

コンサートはまず水牛楽団から。カラワンを紹介し、前座をつとめる。タイの歌は演奏曲目からはずした。それから小室等さん。なんだかわけのわからないコンサートにひきずりだされて、とまどっているかんじだ。ぼくはふだん自分のことを異常だというふうにおもうことはないのですが、きょうは水牛楽団とカラワンにはさまれて、異常だなあとかんじています。なんて言ってるけれど、このコンサートのはなしをもっていったときに、出てもいいよ、と言ってくれたのは小室さんだけだったのだ。

後半はカラワン。なにしろタイの外でのコンサートはきょうがはじめてだ。みんなの緊張感が惻々とつたわってくる。最初は「燃えあがれ炎」。これはスラチャイが「森」にいるときつくった歌で、革命、武器などということばがでてくるのをみれば、今のタイではうたうことのできないものだというのはすぐわかる。この歌は「森」で他の曲と録音され、わたしたちの所へも届いた。風の音もいっしょに録音されているテープだ。「すべての力をあわせて」という題で日本語にも訳されている。

去年の五月、バンコクではじめてスラチャイにあったときのことをおもいだす。「森」から出て一ヵ月に満たない彼は、まだ満身創痍というかんじだった。コンサート活動も再開される前のことで、完全に安全なことは何もなかった。カラワンの歌はタイの歌だから、タイの人のためにうたっていられればぼくは満足なんだけどね、と彼はいった。日本に行って演奏することが必要なことだとはおもえないけど、でもぼくらのセキュリティ（ここだけ英語だったのでよくおぼえているのだ）のためには助けになるはずだ。

今のスラチャイをみていると、去年のあの時が特殊な情況なのであって、もう自分の言ったことも忘れているかもしれないという気になってしまうのだが、わたしのほうは忘れることができないのだった。カラワンの生命と歌の安全のためのひとつの先手になるかもしれないというのが、彼らを日本によぶ決心をしたほんとうの理由だ。

ユーロスペースのような百人位の会場で、しかもPAなしで演奏することは、タイではほとんどないことだ。自分の足もとにお客がすわってるんだからあがっちゃった、とトングラーンがいう。スラチャイは、カラワンのやってる音楽より水牛の方が自分のかんがえかたには近いということがわかった、とかいうけれど信じていいのかどうか……

チケットの精算をしているわたしにスラチャイが横からきく。「ギャラはでそう？」「たぶんね、あんまりたくさ

んじゃないとおもうけど」「かまわないさ。お金はなくてもいいよ、女の子さえいればね」

スニットは四日の朝自力でうちにたどりついた。その日から写真をうつして熱心にはたらいている。

9月5日

モンコンとふたりで辻堂の病院に入院している古屋能子さんをお見舞にゆく。お酒ものまないのに肝硬変で今の所は入院しているが、去年新宿反核コンサートにモンコンと水牛楽団をよんでくれた人だ。そればかりでなく、水牛楽団を理解してくれる数少ない人のひとりでもある。カラワンとのコンサートをきいてもらえなかったのはとても残念だ。それでコンサートの翌日には報告がてら会いに行こうと前からモンコンときめていたのだ。

おとといから容態がわるくなっていて、古屋さんはベッドからおきあがることができなかった。予想していなかったことなので、わたしは胸が塞いだ。モンコンは古屋さんの手をにぎりながら、なにやらしゃべっている。モンコンの「気」が古屋さんに通っているといいとおもう。枕元の赤いカセットレコーダーにはカラワンのテープが入ったままになっていた。

十五分ほどいて、病院を出る。帰り道、ひとりでないのはありがたかった。ありがとう、モンコン。

追記

古屋さんは十月十五日の朝亡くなった。わたしはこの日がくることを、九月五日に覚悟して、病院からの帰り道モンコンにもはなした。でも古屋さんは病気でねているときも、亡くなってからも、実に多くのことをわたしに語りかけてくれている。死者は黙して語らずというのはウソだ。戸村一作さんが亡くなったとき、鎌田慧さんは、戸村さんは死者行動隊になっただけだと書いた。古屋さんもその隊列に加わったのだ。

九月五日はこうして忘れられない日となった。この原稿を書き終えたら、モンコンにも手紙を書いて知らせようとおもう。

古屋さんのためにコンサートをしようかと水牛楽団は相談している。

9月6日

ウィラサクのギターの調子がわるいというので修理に出す。そのついでにみんなでゾロゾロ秋葉原を見物に行く。二時間もウロついて結局だれもなにも買わない。

9月7日

午後スラチャイは毎日新聞のインタビューがあって出かけた。

夜は晶文社が『カラワン楽団の冒険』の著者全員を招待してくれた。晶文社から近い、神田の由緒ある店で「とりすき」をごちそうになる。スニットは東京にきてからカゼをひき、調子がわるそうだ。しかし特派員としての職務には熱心で、いつもメモ用紙を手ばなさず、綿密にメモをとっている。

とりすきをどのようにして食べたか、これは書いておいたほうがいいかもしれない。

鍋を炭火にかけてから、玉子がでてくる。するとその玉子も鍋の中にいれたいと彼らはいうのだ。いや、はやまってはいけない、玉子はこうしといて、煮えたものをくぐらせて食べるのよ、と日本人は説得につとめる。けげんな面持のままためしてみると、ウン、これはおいしい、だけどもっとおいしくできるよ、というのでとうがらしの登場となる。黄色い玉子が橙色になるまでとうがらしをいれる。これで完璧だ！　おいしいからやってごらんよ、とこんどはタイ人に説得されて、とうとう全員が玉子を橙色にした。意外とおいしいね、などといいながら食べおわってみると、竹筒に入ったとうがらしが三本もカラになっているというありさまだった。ごはんは汁気がなくなるまでいりつけてしまったので（もちろんとうがらしをふんだんにいれて）、鉄鍋をこがされてはこまります、と店の人にしかられた。

晶文社でこの店をつかうことは、二度とできないんじゃないだろうか。

9月8日

カラワンの四人の人間関係がこわれかかっていて、タイに帰ってからは、これまでのようにいつも四人で演奏することはできないかもしれないというはなしをきかされ、ちょっとショックだった。

ごはんをつくってやり、パンツも洗ってやり、そのうえもめごとまできかされて、なんだか下宿屋のおばさん的気分になる。

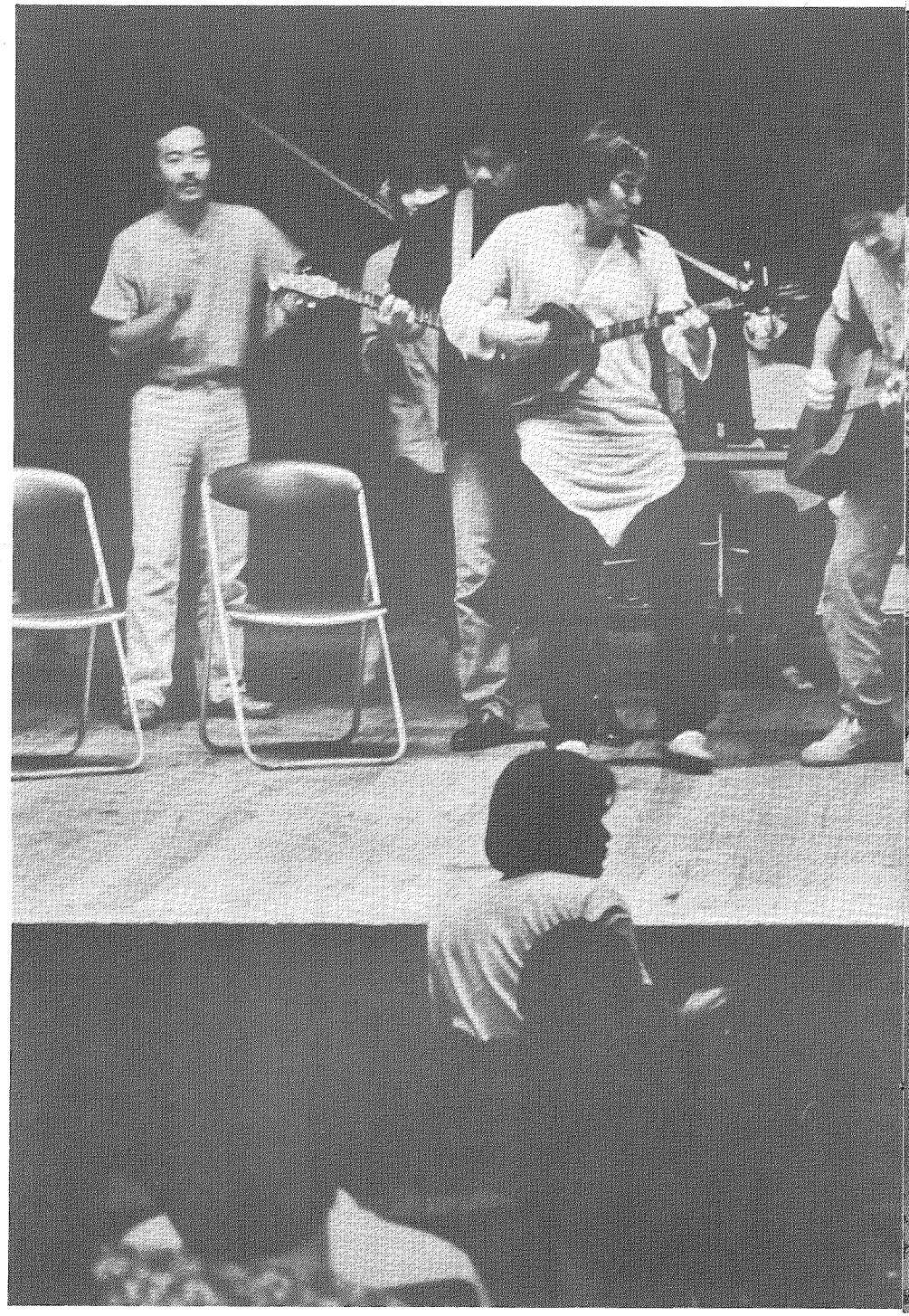
タとウィエンチャイがタイに帰った。

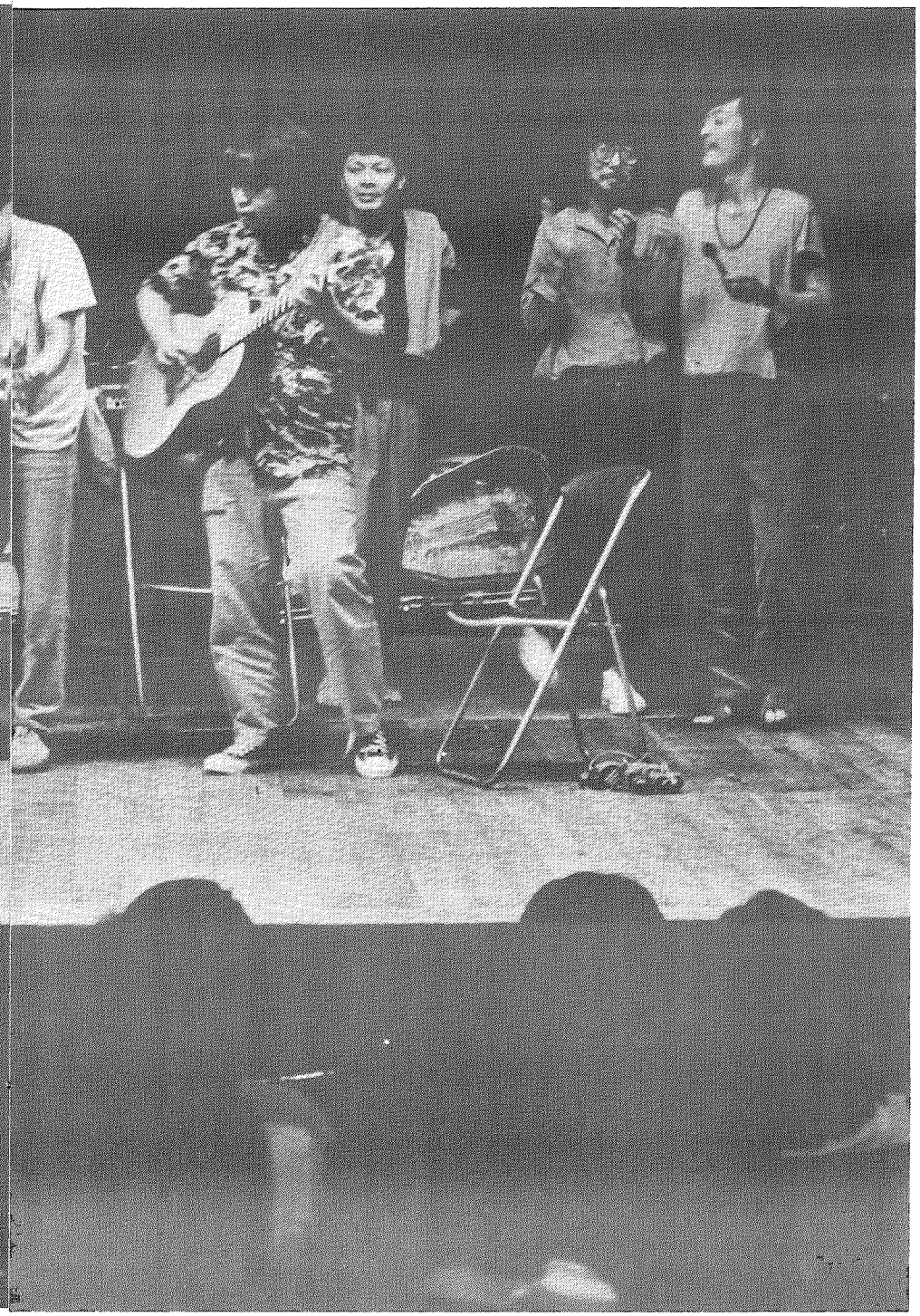
9月9日

日音協の加藤光枝さんの家でカラワンは演奏会。久しぶりにだれもいなくなったので、家をそうじして一息いれる。

セーニーから電話があって十一日に来るという。

9月10日





一週間後にせまった甲府でのコンサートのPAのうちあわせ。小室さんと水牛からは福山敦夫と高橋悠治。

9月11日

スペース桐里の竹前文美子さんが、カラワンのために「からしウォッカ」を用意してくれたというので、全員ひきつれていく。

スラチャイは黒い表紙のスケッチブックを買って、詩や絵をかきつけはじめた。みんなとしゃべりながらでも、書きたいときは書いている。あたらしい歌ができそうだ。

セーニーも無事ついて、あかるいうちからまたきょうもしたたかにのんでしまった。

9月12日

去年つくったモンコンの義足の調子がわるいというので弘済会身障者センターへ行く。きょうは「足の日」らしく、まっている人はみんな義足をはずしている。そればかりか、なおす方もあきらかに義足の人が多く、二本とも自分の足をもっているわたしはおかしな気分になった。なおすのに三時間もまたされてうんざり。

ヒザの関節をかたくされたせいか、帰り道モンコンは何度もつまづいて、ふきげんになる。

あとの人たちは、互井幸枝さんのつくるタイ料理をごちそうになったらしい。トングラーンは待ち合わせの時間に四十分もおくれてひとりとり残されてしまった。出かける時間だというのにゆったり水浴びなんかしてるからこういうことになるのだ。

9月13日

新宿文化センターの会議室で「ミュージック交流会カラワンといっしょ」日音協の主催。水牛楽団は遠慮して参加せず。やっとのことで「水牛通信」を発送する。

9月14日

午後水牛楽団練習。あつまったところで、まずお茶をのみつつ雑談する。これはいつものパターンだが、きょうはその雑談がつきない。もちろんカラワンのことでだ。練習は三十分ほどでおしまい。またお茶をのんで雑談の続きをする。

日音協の窪田さんがきのう使ったカラワンの楽器を届けてくれた。ついでに食事の用意もしてくれるというので安心してビールをのむ。こういうお客は大好きだ。

9月15日

三里塚で反対同盟主催の集会。西沢さんの車にモンコンとわたし、それに楽器をぜんぶつんだ。あとの人は荻窪から国鉄で成田へ。朝から雨で、演奏できるかどうか心配したが歌のときはふしぎに雨もやんでくれた。

こういう政治集会はタイではぜったいできないね、と言いながらスラチャイは見物している。スニットとセーニーは写真をとるのに夢中であるきまわっている。

水牛は「水牛楽団のうた」と「ヨネのうた」カラワンは「やめてくれ」「人と水牛」「スン・イサーン」をうたう。カラワンがうたいはじめると、砂利山の上で監視していた機動隊が、舞台（トラックの荷台だ）がよく見える方へゾロゾロ移動するのだった。

歌は二十分ぐらいだったが、きちんとしたPA装置が用意されていた。カラワンの歌をきょうはじめてきいて、魅了された人は多かった。それはPAがよかったからという理由もあるとおもう。野外では決定的なことだ。

集会のあとは小泉さんの家に寄ってごはんをごちそうになる。野菜がおいしいといってみんなよろこんだ。

成田の駅まで送ってくれた労農合宿所のマイクロバスの中にスラチャイは財布をわすれた。お金はそんなに入ってないからいいけど、大事なのは知り合いになった女の子たちの電話番号なんだ……

9月16日

あすからはじまる地方巡業のしたくに追われる。お金を用意する、カセットなど売るものを荷造りする、切符を買う、マイクロバスを借りに行く、などなど。

マイクロバスは普通免許で運転できる最大のものを借りることができた。それでも十人のりなので、あぶれる四人は電車で移動することになる。

準備完了してうちに帰ると十一時すぎだ。めずらしくもうねている男たちのそばで、ゴソゴソ着がえをカバンにつめたり、電話に出たりするので、ねている方もおちつかないらしく、みんなおきだして、結局またいっしょにお酒をのんでしまう。

9月17日

九時半出発、福山家経由で甲府にむかう。旅のあいだは「家事」から解放されるのがうれしい。

トングラーンはテクノロジー・アレルギーで、かならず運転席のとなりにのりこむ。出発の前に酔いどめの薬ものむ。

甲府は山梨県民文化ホールで午後と夜の二回公演。主催は山梨県連合教育会。日教組の志沢小夜子さんがあいだに

立って助けてくれた。きょうもわたしたちより先に甲府についている。

ホールは二千人入るあたらしいものだった。こういう大きなホールは、カラワンも慣れているのだ。タイではほとんどこの規模のホール、というか映画館だ。

小室さんもきょうだけはバンドといっしょで、よかったね。

午後の部は子どもが多くて、おかしな楽器や、きいたことのないことばに好奇心をそそられているのが風のように伝わってくる。

夜は満員に近い感じで人が入った。たぶん赤字にはならないだろうという情報がはいった。よかった、よかった。小室さんはともかく、水牛楽団やカラワンなんてきいたこともないバンドのコンサートにこれだけの人をあつめるのは、とてもたいへんなことだ。

夜は甲府駅に近い旅館にとまる。部屋割りをきめようとすると、スラチャイとトングラーンがやってきて、たのむからウィラサクをひとりだけ別の部屋にしてくれ、と言う。彼のいびきがものすごくて、同じ部屋になるとねむれないというのだ。余分の部屋はなし、どうしようとおもっていると、モンコンが、だいじょうぶ、ぼくは彼といっしょの部屋でもねられるから、と助けぶねを出してくれた。そうだ、ウィラサクといっしょにねても平気なのはおまえだけだよ、とスラチャイは笑っている。

9月18日

マイクロバスを見送ってから、女三人と高橋悠治は電車で長野へ。電車は所定の時間に到着するが、クルマはそうはいかない。会場の長野県民文化会館小ホールについたのは四時頃。途中なにやら景色のよいところでジンギスカンなんか食べて楽しんだのだそうだ。

きょうの会場は定員三百五十人。マイクがないとちょっと不安なので、全体をひろうマイクを一本立ててもらった。

パイプオルガンが備えつけられていて、高橋悠治はそれで「カラワン」をひいた。

カラワンの最後の歌「スン・イサーン」でとうとうみんな踊り出してしまった。もともとラムウォンという踊りのリズムの歌なのだ。

会場のすぐそばにある、きょうの主催者のひとり吉本隆生さんの店「ゆいまある」で打ち上げてから、飯綱高原へ登る。行先は、だいだらぼっち小屋。つくと、ここにもお酒がまっていた。さっきの踊りの余韻がのこっているところにアルコールが入り、しかも高原の山荘にいるのだ。みんな解放された、というのか完全に狂ってしまったというのか……。とにかくのんで、うたって、おどって。

酔いつぶれた人は先にねた。夜明け近くまで残った人は、外に出て、身のひきしまるようなつめたい大気のなか、満天の星をあおぐ。

矢川澄子さんに、水牛の男たちはよわいけど、女の人はタフねえと感心された。でも、その矢川さんだってさいごまでつきあったひとりだということを忘れてはいけない。

9月19日

きょうの移動は長野から松本なので、朝はわりとゆっくり。木もれ陽のちらちらするテラスでおいしい朝ごはんを食べる。

セーニーは、いつもいちばん遅くまでお酒をのんで、朝もわりと早くおきる。どう計算しても毎日三、四時間の睡眠時間だ。人生はうつくしい、ぼくに残された時間はそんなに長くないことをおもえば、ゆっくりねてなんかいられないよ、と彼はいうが、ちょっとカッコよすぎないだろうか。

松本の会場は護国神社の境内にある美須々会館。わたしは二十年ほど前この町でくらしていたことがあるので、今でも友だちがいる。主催者の高橋卓志さんもそのひとり。変人の多い土地柄が類は友を呼ぶのか、水牛楽団のメンバーも松本が気にいっている。

うれしいことに会場はほぼ満員。みんなミエをみにきたんだよ、とモンコンがわたしをひやかす。

山のふもとの町の人のために、カラワンは「山の人」をうたう。さいごにはまた踊りになった。きのうもきょうもステージが低くて客席とのけじめがはっきりしないから、踊り出すにはもってこいだ。おわっても人はなかなか帰ろうとしないのだった。

神社で演奏し、お寺にとまる。浅間温泉神宮寺。高橋さんの家だ。本堂で大勢で酒盛りし、またうたい、おどる。

小室さんは甲府からタイ語用ノートをつくって勉強している。もう「ゲスト」という気配はなく、ひとつ穴のむじな。

スラチャイはなぜか感傷的になって、散歩しながら、はらはらとなみだをこぼした。今夜はひとりになりたいといい、車のなかで、まるくなってねてしまう。ときどきあることだから心配しなくてもいい、あしたの朝は元気になってるよ、とモンコンがいう。

9月20日

雨ふる。

朝、温泉にはいって、みんないい気分だ。スラチャイも

さわやかな顔で、高橋さんたちのやっている小雑誌「ちくま」のインタビューにこたえている。

きょうはトングラーン、スラチャイ、悠治、敦夫が電車。車は中央高速にのって名古屋まで。いちばん後の座席で、スニットが小室さんとしゃべっている。どうも取材のようだ。あとは全員うつらうつら。

名古屋は名演小劇場。芝居小屋で舞台が高い。PAは使わない。

開演前に李銀子さんが子どもをだいて楽屋にきた。彼女も水牛楽団初代メンバー。結婚して名古屋にいる。

毎日きいているので、小室さんの歌もカラワンの歌も、ほとんどおぼえてしまう。小室さんはカラワンの「鉄を打つ人」が好きらしく、客席にいて、わりと大きな声でいっしょにうたっている。もちろんタイ語でだ。

とめてもらったのは工房地球号。彫金や織物ややき物などをする人たちがいっしょにくらしている、凝った造りの木造のひろい家だ。

ここでもまた宴会。疲れているのに手足が勝手にうごいてしまう。そんな調子でとまらない。小室さんは東京に帰ってたちなおれなかったらどうしよう、となやみだした。

9月21日

名古屋はきのうときょうの二回公演だ。はじめて移動のない日。

水牛楽団、小室さん、カラワンがいっしょにやるコンサートはきょうが最後だ。カラワンの希望で「スン・イサーン」と「カラワン」の二曲は小室さんのギターと高橋悠治のピアノが加わった。

高橋悠治はきょう四十五回目の誕生日。打ち上げ変じて誕生祝いとなる。スニットがぼくたちみんなからです、と言ってくれたのは、ピンクのカエルのぬいぐるみだった。なんというふしぎなセンス。

さて、マイクロバスはきのうから調子がわるくなっていた。持ち主の清川さんは二十三日にこの車を使う予定なので、とり返しのつかないことにならないうちに、水牛楽団だけ夜のうちに出発することにきまる。

雨の中央高速の諏訪あたりで、車は走行不可能になってしまった。修理の車をよんで、なんとか東京にたどりついたのは朝六時すぎ。名古屋では、まだのんで騒いでいるかもしれない。

9月22日

死んだようにお昼すぎまでねむる。

カラワンは広島で、日音協のサンポーニャ主催のコンサ

ト。きょうからは共演者がいないから、負担も大きくなるはずだ。
小室さんは新幹線で帰京。
高橋悠治は三宅榛名さんとコンサートで江の島へ行った。

9月23日

カラワンは京都。京大の楽友会館で、古川豪さんたちの主催。元気にしているかな。
水牛楽団は芸大の芸術祭によばれた。
小室さんはどうしているだろう。

9月24日

朝十時半、東京駅で小室さんとマネージャーの上田さん、志沢さんと待ちあわせ大阪へ行く。大阪サンケイホールで「父母と子どもにおくる平和のためのコンサート」に小室さんとカラワンが出演する。わたしはカラワンのマネージャーということになっている。このコンサートは大阪市教組の主催で主任手当拠出金文化事業として企画されたものだ。お金の心配をしないですんだ唯一のコンサートだし、わたしは演奏しなくてもよいので、気楽だった。
先生に引率された小学生で会場はいっぱい。子どもはずっとしゃべりながらステージをみている。
スラチャイは疲れて声がよく出ないようだったが、まあ無事終る。
奄美からカラワンに会いにきた人もいて、宴会はやはり避けられなかった。
はじめて西洋式ホテルの個室にとまる。

9月25日

巡業はおわった。スラチャイとスニットは案内してくれる人がいて、奈良をまわってから帰ることになった。
重い荷物と重い疲労をかかえて新幹線にのる。口も重くなる。
水牛楽団は、夕方説教祭文の会で演奏があったから、みんなを東京駅からタクシーにのせて、桜新町のうちに帰して、わたしは水牛と合流する。
帰りがけに電話すると、空腹だとモンコンがいうので、食料をかかえてもどる。また下宿屋のおばさん的気分になる。
ウィラサクは荷物をおいて、どこかへ出かけて帰ってこない。
やっとうちに帰ってきたんだから、きょうはゆっくりねようよね、とわたしが言うと、そうじゃないよ、やっとうちに帰ってきたんだから、きょうはゆっくりのもうよね、

と言うべきだと男どもが日々にいうので、あきれる。
セーニーは、これまでのコンサートをまとめてヴィデオをつくってみたいと言いだした。タイ人と日本人が、日本でこういうかたちでコンサートをしたのは、はじめてのことだ。だからタイトルは真赤な字でMade in Japan。タイ人のイメージとはまったくちがうMade in Japan。
セーニーがタイ語と英語と日本語の奇妙にまざったことばで、このヴィデオの計画を熱烈に語るのをきいていたら、いつの間にか窓の外がすみれ色になっていた。

9月26日

夕方からパイオニアのスタジオで小室さんの「音楽夜話」の録音。カラワンがゲストだ。大阪からかえって小室さんは発熱したそうだ。ほんとのビョーキになったんだ。
三里塚の小泉英政さんが、スラチャイの財布をとどけてくれた。小泉さんは十一月にバンコクへ行く予定があるそうだ。バンコクまで来るんなら、イサーンへつれていきたいとモンコンが言う。実現するといいとおもう。
スラチャイは「ナリタ」という詩を書いた。小泉さんも、スラチャイの詩とならべてのせるのを条件に、詩を書いてもいいという。
西沢幸彦はモンコンにせがまれてGのキイのサンポーニャをつくってやった。去年東京からもって帰ったサンポーニャは「カラワン」のはじめにつかわれている。「水牛楽団のうた」のはじめの部分は「カラワン」に呼応してつくられたのだ。

9月27日

セーニーはヴィデオ製作を実現させるべく精力的にうごきまわっている。
一日かかってこの一ヵ月のお金の精算をだいたいすませる。雨がふりつづいて、山のような洗濯ものがかわかない。

9月28日

カラワンは日本で最後の仕事。全国一般南部の主催で、カールビンソン反対の集会をかねたコンサート。商業界ホール。ひどい雨であまり人はあつまらなかったがリラックスした雰囲気だ。雨で交流会もながれた。
うちに帰って、バンク・オブ・水牛のわたしから、バンク・オブ・カラワンのモンコンへ、これまでの労働の報酬をわたした。わたしの説明をきちんと書きとめているのをみると、そういいかげんな銀行でもなさそうだ。みんなにお金がでたことも連絡した。

9月29日

おきてみると、もうトングラーンが帰ってきている。お金の入った封筒をモンコン銀行からもらうと、安心してまたねてしまった。

チリ人民連帯集会でチリの歌を何曲か演奏してから「お別れパーティ」と称してまたあつまり、のむ。きょうの費用は銀行同士の協定により、水牛とカラワンの折半にした。

このように毎日のむのは相手のせいだ、とみんながそれぞれおもっている。

来年一月、バンコクでまたユニセフのコンサートがあるという。みんなをそれによべるといいんだけど、とその世話人のスニットはいい、小室さんは、行くっきゃないね、とこたえている。このさわぎをまたタイでくりかえすのだろうか。おそろしいことだ。

9月30日

帰国を前に買物にくりだす。買いたいものがそれぞれちがうため、調整できず、渋谷の交差点でバラバラになった。

夜帰ってから買ったものを見せびらかしあう。オーディオ製品やレコードはいいけど、着るものは高くて買う気にならないという。

最後の夜はあわただしくすぎた。おわかれのカンパイをし、すぎたばかりのデタラメな一ヵ月をもうなつかしむ。

十月一日、ウィラサク、トングラーン、モンコンが帰った。その後、原宿の竹の子族などを取材したスニットが十月四日、名古屋にあそびに行ったスラチャイが十月五日、ヴィデオをつくるめどのついたセーニーは十月八、九日と、二日も飛行機にのりおくれて十日にやっと帰った。

カラワンと演奏、労働をともにしたこの一ヵ月のことをどう総括するか、まだわたしにはわかっていない。はたして総括する必要があるかどうかも疑問だし、その結果カラワンをせまいイメージにとじこめてしまったとしたら、それこそ問題だ。

カラワンと水牛の二つの楽団が楽団として成りたっているうちに、いっしょにコンサートができたことは、とにかくうれしかった。水牛楽団をはじめたときも、タイ語をはじめたときも、カラワンを日本によべるとは、ほとんど想像すらできなかった。コンサートのために力をかしてくれた人たちとの関係もふくめて、すべての偶然がカラワンをよぶことにうまく収斂して実現したのだという気がする。

個人的にいえば、おおらかで率直な男たちと、限られた日々をいっしょにくらせたのは幸運だった。彼らとつきあっていて、目をひらかれたことは何度となくある。下宿屋のおばさんの役得だったのかな。

地下からの対話

スニット・ティワワエート

地下鉄の一車輛の中。客席と向かい合って座席が一列ある。背景は窓で、時おり間をおいて明るく光る。駅に停車するときは、この車窓にスライドで写し出す。

登場人物

スラチャイ　年のころ三五～四〇歳くらいの男。髪はモジャモジャで、一見したところヒッピーまがいのかっこうをしている。ただしよく注意してみると、服装に神経を配っているのが分る。片手にギターを持ち、肩からカバンを下げている。

ユージ　四〇～四五歳くらいの中年の男。清潔できちんとした身なりをしている。冷静で慎重で自分を見失なわないといった風ぼう。

学生　二〇～二五歳くらいの男女の学生。活動家風。それぞれにプラカードを持っている。

老人　相当の年ばいの男で立派な身なりをしている。体制側を代表している。

若い女　二五～三〇歳くらいの美しい女。国籍不明。

＊

暗い……地下鉄の走る音が次第に大きくなると、車窓が時おり明るく光る。舞台一方の隅にユージの坐っている影。もう一方の隅に女の影。駅に着く。スライドが車窓上に駅を写し出す。車輛のドアが開

くと照明ON。スラチャイが舞台の中央に出て来て座席をさがす。

スラチャイ　（混雑すべき時間帯に、ほとんど人がいないことにけげんそうなそぶりで）ねえちょっと……すいませんが……あなたのことですよ、どこを向くんですか。この車輛にあなた一人しかいやしないじゃないですか。いったいみんな、どこへ消えちゃったのかしらん……知ってますか？

ユージ　（一向に動じた様子もなく）さあ、分りませんねェ。

スラチャイ　分りませんって、それじゃあなたどこから乗って来たんですか。だいたいこの時間は普通なら、魚のかんづめみたいにぎゅうぎゅうつめこまれているじゃありませんか。

ユージ　（ほほえむ）さあ、分りませんねェ。

スラチャイ　えーと、サイアム駅まであといくつぐらいですか。

ユージ　（分らないといった風情で）さあ、分りませんねェ。

スラチャイ　分りませんねェ、分りませんねェだって……この男、これ一語しか言えないとみえる。（イライラする）

どうですか、タバコ吸いませんか。タイのタバコ、うまいよ。ガンチャー（大麻）が少し混ぜてある。こんな人っ気のないところに坐ってるんだからさ、退屈しのぎにいいのよ。

ユージ　（にっこりするが答えない。禁煙のサインを指差す）

スラチャイ　これをしてはいけない、あれをしてはいけない、なんてサインをどうして気にするんですか。自分を枠にはめない方がいい。あなたはまるでロボットだ。

ユージ　ぼくは好きじゃないな。

スラチャイ　ねえ、ちょっと訊きたいんだけど、あなたのロボットの中でまわっているテープには、さあ、分りませんねェ、と、ぼくは好きじゃないな、しかないんじゃない。フー……いやになる。

ユージ　（にっこりする）

スラチャイ　じゃあこうしようよ。ぼくは歌をうたう。あなたが楽器ができるなら、いっしょにやれるし。ぼくの行くサイアムまではまだ大分遠いし、この電車の中にはあなたとぼくしかいないんだ。うるさかないでしょ。うるさいって言われてもぼくはやるけど。気に入らなかったら、耳をふさいでいてよ。

ユージ　（にっこりする）

スラチャイ　（ギターをケースからとり出す。しばらく音

をあわせている。うたいはじめて……笑う）ぼくの歌からいこう。

スラチャイがギターで「カラワン」の曲を弾きはじめると、照明が消えて、スライドがカラワン楽団を写しだす。テープが「カラワン」を終りまで流す。曲が終ると車中は再び明るくなる。

ユージ　（びっくりしたようで、大変興味をそそられている）何の歌、これは。悪くないじゃない。まだほかにもあるの？　気に入った。

スラチャイ　（笑う）あなたも音楽がわかるじゃない。気に入ってくれたんなら、別の曲も聴いてよ。この電車の旅にもだいぶあきちゃったから。

スラチャイとユージのスポットを残して、照明が暗くなる。再びスライドがカラワン楽団を写し出し、「人と水牛」をテープが流している間、スラチャイのスポットは次第に暗くなり、ユージのスポットのみが残る。ユージは曲に興味を示している。曲が終ると照明がもと通り明るくなる。

ユージ　（拍手する）えーと、あなたの音楽が気に入ったけど……これはいったいどういう音楽ですか。

スラチャイ　ぼくのくにでは「生きるための音楽」って呼ばれているけど、ぼくにとっては、ぼくの好きなスタイルの音楽だっていうだけのこと。ぼくはこういうふうにうたいたい。たぶんそれがぼくに合っている。

ユージ　アメリカ風だけど、完全にそうでもない。

スラチャイ　うん。とり入れてはいるけれど、ぼくらのくにの地方の音楽と新しい音楽が混じりあっている。

ユージ　じゃあ歌詞は？

スラチャイ　ぼくらのくにで起こっていることを物語っている。だいたいは貧しい人たちのことね。

ユージ　生きるための音楽、生きるための音楽……

スラチャイ　どうして訊くのよ。あなたも音楽家なの？

ユージ　そう……ぼくもまあ音楽をやってる。

スラチャイ　楽団でもやってるの？　なんて名前の？

ユージ　そう。水牛って呼んでる。

スラチャイ　じゃあ、あなたがたの歌を聴かせてよ。

ギターを手渡そうとするが、ユージは礼を言うだけで受けとらない。自分の袋から楽器をとり出す。照明が消える。ユージがブラジルの歌をひきはじめ

る。曲が終ると再び照明がもとにもどる。

スラチャイ　ワウ……悪くないじゃない。南アメリカの歌みたいな感じがする。

ユージ　そうよ。ブラジルの革命家の歌ネ。ぼくが歌詞を日本語にしたの。

スラチャイ　もっとやってみてよ。

照明消える。スライドと歌。歌は楽団のテーマソング「水牛」。終ると再び照明。

スラチャイ　ほんとにいい歌ね。だけど、あなたがた自身の歌ってないの？

ユージ　目下努力していますよ。

スラチャイ　あなたがたは日本の社会と変わるところがないな。

ユージ　変わらないって、なにが？

スラチャイ　なにがって、生命力に欠けてるっていうこと。以前本を読んで、日本人の生き方にかなり関心をもったことがある。武士道精神って強烈で、誠実さを護るためとか、団結を破らないとかのために、生命まで犠牲にする。強い民族意識とか……。

ユージ　（反論する）過去の民族主義なんかもち出して、どこがいいのか分りませんね。

スラチャイ　ちょっと待ってよ、まだ終ってないんだから。ぼくは誤った民族主義を正しいと言ってるわけじゃない。だけどアイデンティティっていうのは必要でしょ。古いものから受け継ぐとか、新しくつくるとかして。ところがあなたがたの社会ときたら……まわりを見まわしてごらんなさいよ……この電車の中で誰か話しあってる人いますか。隣りの人の体臭とか呼吸とか感じますか。何もないでしょ。誰もが自分一人の影とかかずらわってる。

ぼくがはじめて東京に着いた日のこと、あなた分りますか。ぼくはほとんど発狂しそうだった。森で相手とはぐれてしまったちょうちょうが、コンクリートの高層ビル街にさまよいこんでしまったのと同じで。錯綜した大交差点。渇きを癒してくれる甘い水をさがしても、出会うのは扱い方も分らない金属製の缶ばかり……。

このことで言えばサ、アジアの国々が全部でボタン戦争をはじめたとすると、あなたの国が勝つに決まってるな。生まれてこのかたボタン押すのに慣れちゃってるんだから。なにからなにまでがみんな自動、自動。ボタン押すだけ。指の先がみんな平らになっちゃってるんじゃない……ハッハッハ。

ユージ　（にっこりする）それでぼくたちにアイデンティティがないっていうはなしは？

スラチャイ　（タバコに火をつけて吸う）歌のことだけに限って言えば、あなたの仲間が、JAMERICAN だって、一言（ひとこと）で説明してくれたことがある。分るでしょ。広い意味でいえば、あなたの社会のすべての面についてもいえる。短い間に見たことだから間違っているかもしれないけれど、見た限りじゃ、あなたがたの社会は、アメリカの模倣が行きつくところまできている。生活様式、経済、こころのもちかた、それに社会の最小単位家族にいたるまで。家族のメンバー同士もバラバラ。ぼくが今まで学んできたこと、見てきたこと、理解してきたことからはるかにかけ離れているな、と思う。

ユージ　あなたの言っていることは、正しいこともあるけど、全部じゃありませんね。こころの奥ではわたしたちは、以前とあまり変わりないアイデンティティを持っていると考えられていますよ。

スラチャイ　（反対する）そうはいっても見た限りの表現形態でいえば、そんなものはどんどん少なくなっているんじゃないの？　今のティーンエイジが社会人になったころの生活様式なんて、今と同じだろうって信じてますか。彼らにとってアメリカは新しい神なんだ。

ユージ　それであなたは、どうしたら解決できるって考えているワケ？

スラチャイ　それはぼくの理解を越えたあなたがたの問題でしょ。ぼくは短い間に感じとったことを言ったまでだ。まだよく分ってるわけじゃない……だけどこわいな……

ユージ　何がこわいの。

スラチャイ　この社会でぼくが見たことは、ぼくらの社会にも起きるだろうってことだ。子供が、まだそんなことを考える年齢になっていないのに自殺するようになるとか。将来ぼくらの国がすっかり近代化されて、人びとのこころは外国文化に侵食されてしまって、それが殺しても死なない怪物みたいに居すわっちゃうとか。

ユージ　それでぼくの音楽と何か関係があるワケ？

スラチャイ　（ギターをケースにしまう）あなたの音楽の話にもどるとすれば、ぼくからみれば、あなたの音楽にもアイデンティティがない。楽器はあなたがたの民族楽器を使っていても、あなたがた自身の時代を反映しえていない。メロディーもリズムも身近かなものじゃないから、こころにしみ入りにくい。歌詞でいえばなおのこと深く理解するのはむずかしいと思う。たとえば「水牛」という曲、それから楽団の名前。ぼくは日本でまだ一頭の水牛も見たことがない。これで聴く人たちの共感を呼べるのだろうか。彼

らに水牛の価値が分るようになるだろうか。ほんの少数の興味を持っている人たちの想像力をかきたてるだけだ。それであなたは、ほんの少数の人たちに聴いてもらいたいだけなの？

ユージ　この世界で起こるどんなことがらでも、わたしたちみんなでこころを合わせて考え、見守っていくべきです。この世界のどの部分で起きた問題であっても、みんな分かちがたくかかわり合っています。あなたのように考えるのはちょっと狭すぎますねェ。

スラチャイ　全然否定しませんよ。だけど、それでもぼくらは自分自身を理解することからはじめなきゃならない。あなたの国の地方の歌だっていいメロディやリズムがたくさんあるでしょ。それを、あなたがたの社会でいっぱい起きていることがらと結びつけたら、あなたがた自身を反映した歌ができるんじゃないかと思う。

ユージ　やっていますよ。

スラチャイ　もうこれ以上反論しないけど、つけ加えると、ぼくらが強調すべき大事な点は、ぼくらがよく分っているありのままの生活の現実にねざしているっていうことで、外国の話はそこから派生してくればいい。ぼくらも人類兄弟を見捨てようとは思っていない。とはいっても、ぼくの歌にも問題があるんだ。あなたがたとあまり変わらない。

ユージ　どういうことですか。

スラチャイ　聴いてくれる人たちの層が狭いっていうこと。マイノリティ・グループといえる。ぼく自身もしっかりと原因がつかめているわけじゃない。

ユージ　メロディーが人を興奮させるようなものじゃないからかもしれない。若い子たちはそういう曲を好むから。

スラチャイ　そのとおりネ……それがひとつ。

ユージ　速いテンポの曲もあるんでしょ。

スラチャイ　だいたいは古い曲ね。

ユージ　古いもの売って食べるってことね。

スラチャイ　そう……楽しいメロディーの曲を作るには、ぼくは年をとり過ぎてしまったみたい。それにぼくはぼくの作りたい歌を作っていたいし。

ユージ　あなた自身、自分が言ったことに反してるじゃない。ぼくには、ぼくの歌を時代と社会を反映したものにしろと言っておいて、自分ではできていない。

スラチャイ　そうなんだ……ぼく自身も混乱してる。もっと広い層に聴いてもらうために、歌謡曲調のメロディーで、自分の語りたい内容をもりこんでみようとか、思うこともある。でもダメね。結局、全然やる気にならない。

ユージ　あなたはずい分自分本位な芸術家とお見受けしましたが……はっきり言ってごめんなさい。

スラチャイ　かまわないけど、それでどうすりゃいいの。ぼくがやりたくないから、やらないだけよ。

抗議集会のアジテーションのような叫び声が、徐々に大きくきこえてくる。

ユージ　そういう答えかたじゃ、結論が出せないでしょ。

スラチャイが学生の一団を指差す。それぞれにプラカードを手にして、乗ってくる。

スラチャイ　知りたかったらこの連中を見ればいい。

学生1　核戦争反対！

学生2　第三世界の貧困に抗議しよう！

学生3　帝国主義の弾圧と干渉反対！

学生4　資本主義体制反対！

学生たちはプラカードを持って地下鉄に入ってきて、ユージとスラチャイの前をねり歩いて次の車輛に消える。すると一人の老人が入ってくる。

老人　（一人ごとのように）こういう連中ときたらどこまでも体制に反対しよる。どれだけいい生活ができるようにしてやっても満足しない。分裂していてなによりだ。大同団結でもされたらえらいことだ。……そうでしょう、そこのお二方……どういうことだ、こっちが話しかけても答えようとしない。変わった連中だ。

不満そうな様子で老人は、学生たちと反対方向へ消える。しばらくしてユージとスラチャイがまた話しはじめる。

スラチャイ　見てよ。こういう風で、ぼくに誰と合わせるっていうワケ？

ユージ　やめましょうよ。ぼくにも見えてないんだから。

今まで暗くしてあった隅が明るくなり、若い女がゆっくりと顔をあげる。スラチャイが、信じられないといった顔をする。

若い女

ぬすみ聞きしてごめんなさい
そんなに時間はとらせません

あなたがたの長いお話
すぐに解いてみせましょう
あなたがたお二人とも思慮深い
どちらが間違いかとくと検討しましょう。
ご存知でしょう、二人とも
本質的にはかわりないと
お好きなことをおやりなさい
ただ、この質問からはじめて下さい
いつもうたわれる愛のことば
それがどこまで真実かと
誰でもみんな平等です
ひとつの側をとりあげておさえつけ
ふるえあがらせてはいけません
広い愛をうたって下さい
愛について歌を書いて下さい
悲しみのこころを歌にして下さい
悲しんでいる人たちの声を歌にして下さい
悲しみが喜びにかわる歌を書いて下さい
弾圧している人たちに歌を書いて下さい
彼らに愛がとどくように
正義の国への道が見えるように
じゃまされても、じゃまされても
くりかえし愛をひろめて下さい
痛みを伝えて
彼らが道を正すように
悲しみの涙にくれている人たち
世界に向かってだいたんに
為政者たちにたちむかうのです
敵がおしつぶしにかかっても
もっと大きな愛をかたって
あやまちを赦しなさい
ふりかえって罪を悔いるように
敵のこころに愛をおこすのです

スラチャイ　何も分ってないじゃない。敵を赦してやるやつがどこにいるかい。人を殺したやつは罰を受けるべきだろ。赦してやるとはなにごとだ。

車窓にスライドで駅。若い女はドアの方に進み、ふりかえって一言(ひとこと)述べてから降りる。スラチャイはドアのところまで追いかけていく。

若い女

歌もおなじ
意味もおなじ
メロディーもおなじ
人もおなじ
社会もおなじ
こころもおなじ
愛もおなじ

スラチャイ　へーイ……君、君。全然わけがわからないや。どうなってんの……あれっ、もうすぐぼくの街だ。（ドアが自動的に閉ると、スラチャイは席に戻ってきて、降りる準備をはじめる）ぼくはもう降りるけど、何かまだ話すことあったら急いで言ってよ。またいつ会えるか分らないけど。でもぼく、あなたのことが好きだな。

ユージ　ありがとう。ぼくもおなじだ……君のことが好きだ。

スラチャイ　あなたはどこで降りるの？

ユージ　さあ、分りませんねェ。ずい分遠くから来たなあ。ほんとにずい分遠くから。

スラチャイ　もう帰らないつもりなの？

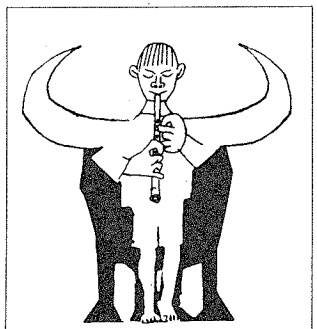
ユージ　帰りたい。君のように、家へ帰りたい。でもぼくはあまりにも遠くへ来てしまった。

スラチャイ　何を言ってるのか分らないな。まあいいや……じゃあ降りるから。ぼくも家までの道が分るか確信がないな。家を離れてからずい分長いから。ほんとにずい分長いから（口真似をする）……じゃあネ。

ユージ　さようなら

車窓にスライドで駅の風景。スラチャイはふりかえらずそのまま降りる。そして幕の背後へ。ユージはまだ坐っている。照明、次第に暗くなる。同時に地下鉄の走る音が次第に大きくなる——幕

（荘司和子訳）



水牛楽団のページ

水牛楽団のボーケン。

さて今回は、水牛楽団有史以来、屈指の出来事、水牛楽団の持ちうたでもあり、また楽団誕生のきっかけにもなった「人と水牛」を作曲したスラチャイひきいるカラワン楽団の来日。おそろしいことに、わが貧乏楽団がよんでしまったのでした。

まず大変なのは、身柄の引き受け所、要するに寝るところです。これは何といっても団員の中で最も広い屋敷の一部に住んでいる、福山邸に何人かと、悠治さんの家に残りが、「ごろ」っと居るという、「ごろっ」というのは正にそう、河岸のまぐろよろしく「ごろっ」と横たわっているのです。またおそろしいことに随行記者が二人やって来たのです。カラワン楽団が四人、記者が二人計六人をなんとか両家におさめて、九月の三日四日と渋谷のユーロスペースでコンサートを行なう。前座として水牛楽団、その後、小室等さんとカラワン楽団、八十人程のスペースに百人以上も入場していただき、文字通り熱気の中の熱演。

そのプログラムを持って九月十七日甲府、十八日長野、十九日松本、二十、二十一日名古屋と演奏旅行をして廻ったのですが、これが大さわぎ。カラワン諸氏の酒たるや、コンサート終了後、各地の歓迎などもあり、毎晩二時三時、ひどいときは夜が明けるまでラムウォンなどというタイのおどりをおどりつつ飲んでいたとか。

私は、酒を飲まない上にタイ語も話せないという具合で、始めはビールに口をつけ、挨拶程度をタイ語で言ってみたりもするのですが、しだいにやけくその日本語と不気味な愛想わらいに変り、何とも微妙な感じになり寝てしまうのです。ところがです、皆さん！福山さんは、あの大きな目が倍位の大きさになり、タイ語で彼等とわたり合っているではありませんか。八巻さんは、かなり以前よりタイ語を勉強していたし、タイへ行ったりして、タイ語を話せるのは知っていたのですが、彼はカラワンの来日が決って急遽始めたタイ語、わずか六ヵ月位でこんなにまでも上達するものかと、おどろきと羨望のまなざしで見つめつつ、「今、何て言ったの？」などと聞いたりし、はじめは正確に通訳してくれていたのだが、酔いがまわるにしたがって、難聴なのか面倒くさい故か、返事も返ってこず、彼らとともにあびるように酒を飲み、当然の結果として、あくる朝は、

みな二日酔。起き上るというより、ふとんからはい出してくるという感じで、ひりつく胃に朝食をながし込み、割れそうな頭をかかえて、また一日が始まる。

こんなことをくり返しながらも無事に名古屋公演も終り、カラワンは広島へ向う。我々は経費節約のため借りたマイクロバスを返すべく。名古屋公演終了後すぐに、中央高速道で大雨の中一路東京へ。きげんが悪いながらも走りつづけてはいたマイクロバスが、諏訪湖のあたりでついにストライキをおこし、真夜中にもかかわらずライトが少ししかつかなくなり、雨よけのワイパーが動かなくなり、インターチェンジで修理の車を待つこと小一時間。次の出口で出て修理して帰った方がよいという忠告をふり切って、きげんの悪い車をなだめつすかしつころがして、東京に着いたら、もはや早朝。せめてラッシュにあわなくてよかったなどと、自らなぐさめながら全員各家へ無事帰還。数日してカラワンも帰京し、つつがなく全行程を終了しました。

九月二十三日、母校東京芸術大学の芸術祭によばれる。ほとんどの人が音楽を専攻しているとみえ、我々がセッティングしていると興味ぶかげに見ている。始まったとたんに、何と目が点のようになって不思議な雰囲気がただよう。演奏終了後にディスカッションがあり、何やらむつかしい質問がとびかう。悠治さん一人でうけて立っていただいて、外でタバコなどすっているとと終っていた。

九月二十五日、説教祭文の会によばれる。新宿文化センター会議室。たたみの間で、坐って演奏する。

九月二十九日、水道橋労音会館で、チリ人民連帯集会でチリの歌、日本の歌を演奏する。

十月二十一日現在、カラワン・記者全員が帰国し、また平和な水牛楽団にもどって居ります。

今後の予定は、

十月二十五日、千代田区役所でチリの歌を三十分ほど。

十月二十九日、ユーロ・スペース主催の「ポーランドの夢・水牛楽団コンサート」3時7時の二回、ゲストは水木陽子さん。

十月三十日、平和inねりま市民祭。

十一月二十二日、アジアの人々と連帯する婦人の集い。千葉文化会館で5時から。

十一月二十四～二十九日は石川県巡業。教育をかんがえる講演と音楽の夕べ。二十四日小松市、二十五日羽咋市、二十六日金沢市、二十七日羽咋郡、二十八日輪島市、二十九日珠洲市。

十二月三日、神奈川県立音楽堂。如月小春さんと共演する。

十二月十日、スペース桐里で「神の道化」4時、7時の二回。

（西沢幸彦）

水牛通信　毎月1回10日発行　1983年11月10日発行　通巻52号　1980年5月23日第三種郵便物認可

編集後記

来日したカラワンを特集する十月号の編集がまにあわず、ついに合併号となった。事情は八巻美恵の「日記」にあるとおり。五年目にしてはじめての黒星である。四ページ増ということで勘弁してください。

もうひとつお詫び。コンサート・ツアーに参加してくれた小室等さんへのインタヴューを本号にのせる予定だった。

カラワンの最後の一人が帰ったあと、吉祥寺の飲み屋にあつまり、おおいに気勢があがったのだが、テレコの故障に気づかなかったのが運のつき。三分の一しか録音できていなかったのである。ひと仕事おえた解放感のあまりのつよさゆえか。小室さん、ごめん。

帰国したカラワンは、あいかわらず仕事がないらしいけど、タマサート大学の大集会で元気に演奏をして喝采をあびたそうだ。荘司和子さんがその様子を見てきたので、次号では彼女の話をきけるかもしれない。こんどこそつつがなく発行にこぎつけるつもりです。

本号14、15ページの写真は伊藤孝司さんの撮影したものです。

アジアの「文化・歴史・思想」誌

第2次凱風創刊 特別増大号

凱風

第7号

A5判160ページ
定価780円

発売中

特集 豊かさの中の戦争状況

〈内容紹介〉
- 日本復帰10年・沖縄の精神医療　島成郎
- 帰国後の中国残留「孤児」問題　清水勝彦
- 三つの国を生きた朝鮮人映画人　内海愛子
- 碑文の行方　仲程昌徳
- サハリン残留韓国人の望郷40年　高木健一
- ◇アジアの映画／フィリピンの巻
- ◇魯迅と創作木刻運動について

お近くの書店でお求めください。
定期購読料（6回分）　4800円（送料共）
定期購読料（3回分）　2400円（送料共）

東京都中央区銀座1-20-2　凱風社　電話03-567-5030　振替東京5-88715

水牛通信　第五巻第十号
九八三年十一月十日
定価　二〇〇円
発行人　堀田正彦
発行所　水牛編集委員会
〒154東京都世田谷区新町2-15-3　八巻方
電話〇三（四二五）九六五八
振替口座東京四-九一七九二
印刷所　㈱トライプリントショップ

*予約購読の申し込みと送金は郵便振替を利用して下さい。
口座名、水牛編集委員会
口座番号、東京四-九一七九二
購読料、一年分三〇〇〇円（送料共）
半年分一八〇〇円です。
*住所、氏名、電話番号、何号からということを明記してください。
*本誌は次の書店にあります。
模索舎（新宿）☎三五二-三五五七
木風舎（阿佐谷）☎三九八-二六六六
信愛書店（西荻窪）☎三三三-四九六一
アール・ヴィヴァン（西武池袋12F）☎九八一-〇一一内線二九五六
名古屋ウニタ書店　☎七三一-一三八〇
ワンラブブックス（下北沢）☎四一一-八三〇二